

# 能『羽衣』の英訳についての一考察

— 英語能の試みに向けて —

## The English Translation of the Noh Play *Hagoromo*: Reflections on Noh in English Translation

宮 田 修 (Miyata, Osamu)

We examine Arthur Waley's translation of *Hagoromo* in a critical manner and suggest a more accurate and poetic translation which will reflect the same dramatic intensity as the original and enable us to perform the play in English. For this purpose, we would like to come as close as possible to the Noh text in terms of both "meaning" and "style" in order to reproduce the imagery, symbolism, choice of words and patterns of rhythm that the original text contains.

能『羽衣』の完全な英訳は、エズラ・パウンド(Ezra Pound)とアーネスト・フェノロサ(Ernest Fenollosa)の共著として1916年に出版されたのを皮切りに<sup>1)</sup>、その後、アーサー・ウェイリー(Arthur Waley)によって1921年に<sup>2)</sup>、近年ではロイヤル・タイラー(Royall Tyler)によって1992年に出版されている<sup>3)</sup>。いずれも能原典の主題と意味内容を伝える努力がなされており、文学的観点からは高く評価されているが、意味を優先させるために形式が大幅に変更されている。能の音楽的特色が無視され、各小段の詞章的特色が無視されているために、実際にこれらの翻訳を用いて能を上演することは不可能である。箇所によっては、文学的特色を出すために、また現代演劇の観点から論理と構成の統一を重んじるあまり、能の構成に手を加え、原典とはかけ離れたものになっている。

本論文は、『羽衣』の舞いどころ、聞かせどころの一つである曲の主軸クセの部分を取り上げ、能の上演台本に基づき、その文体にあった英訳を試みるものである<sup>4)</sup>。英語能の実現に向けて原典の微妙な文体的特色を生かしつつ、英語としても文学的価値を損ねないような再現を試みる。初めにあげた3つの英訳の中から最も原典に忠実に英訳されていると考えられるウェイリー訳と比較しながら、試訳を進めることにする。

### I

能『羽衣』は春の朝、漁夫白竜(ワキ)と随行の漁夫2人(ワキツレ)が三保の松原に行くところからはじまる。やがて白竜は松に美しい衣のかかっているのを見つけ持ち帰ろうとする。衣の持ち主が現れ、返してほしいと頼むが、その女性が天人(シテ)であることを知った白竜

は家の宝とするために羽衣を返そうとしない。が、やがて嘆き悲しむ天人の哀れな姿を見て、白竜は衣を返す。羽衣を着た天人は、静かに優美に「東遊の駿河舞」を舞い始める。天人は国土の繁栄を願いつつ、三保の松原から愛鷹山、さらには富士の高嶺へと舞いあがり、やがて霞の中に消え失せる<sup>5)</sup>。

クセは、羽衣を着た天人が、天上と変わらない地上の美しさを愛でるところから始まる。クセは、七五調を基本とした韻律で、大小の鼓に合わせて八拍のリズムに載せて謡われる。以下、クセの詞章の右側に行数を示す。

クセ

地

春霞。 1 月も曇らぬ日の本や。 20

靉きにけり久方の。

月乃桂の花や咲く。

シテ

げに花鬘

君が代ハ。

色めくハ春のしるしかや。 5

天乃羽衣稀に来て。

面白や天ならで。

ここも妙なり天つ風。

地

雲の通路吹き閉じよ。

撫づとも盡きぬ巖ぞと。

少女乃姿。

聞くも妙なり東歌。

暫し留まりて。 10

声添へて数々乃。 25

こ乃松原の。

笙笛琴箏篳

春乃色を三保が崎。

孤雲乃外に充ち満ちて。

月清見濁富士の雪

落日乃くれないハ

いづれや春乃曙。

蘇命路乃山をうつして。

類ひ波も松風も 15

緑ハ波に浮鳥が。 30

長閑なる浦乃有様。

拂ふ嵐に花降りて。

その上天地ハ。

げに雪を廻らす

何を隔てん玉垣乃。

白雲乃袖ぞ妙なる。

内外の神乃御裔にて。

この原典をウェイリーは次のように英訳している。

CHORUS.

"Now upon earth trail the long mists of Spring;

Who knows but in the valleys of the moon

The heavenly moon-tree puts her blossom on?

The blossoms of her crown win back their glory:  
 It is the sign of Spring.  
 Not heaven is here, but beauty of the wind and sky.  
 Blow, blow, you wind, and build  
 Cloud-walls across the sky, lest the vision leave us  
 Of a maid divine!  
 This tint of springtime in the woods,  
 This colour on the headland,  
 Snow on the mountain,  
 Moonlight on the clear shore,—  
 Which fairest? Nay, each peerless  
 At the dawn of a Spring day.  
 Waves lapping, wind in the pine-trees whispering  
 Along the quiet shore. Say you, what cause  
 Has Heaven to be estranged  
 From us Earth-men; are we not children of the Gods,  
 Within, without the jewelled temple wall,  
 Born where no cloud dares dim the waiting moon,  
 Land of Sunrise?"

## ANGEL

May our Lord's life  
 Last long as a great rock rubbed  
 Only by the rare trailing  
 Of an angel's feather-skirt.  
 Oh, marvellous music!  
 The Eastern song joined  
 To many instruments;  
 Harp, zither, pan-pipes, flute,  
 Belly their notes beyond the lonely clouds.  
 The sunset stained with crimson light  
 From Mount Sumeru's side;  
 For green, the islands floating on the sea;  
 For whiteness whirled  
 A snow of blossom blasted  
 By the wild winds, a white cloud

Of sleeves waving.

原典では、クセは、地（ち）、シテ、地の順に構成され、通例8人の地謡（ごうたい）によって謡われる合唱部分の地の間にシテの謡が挟み込まれているが、ウェイリーは後の地を天人の言葉に変えている。

つまり、原典では、最初の地は地上界を眺めたときの天人の感情を地謡が代弁して謡い、天人の言葉に続く地は第三者として地上の人間が天人の様子を描写するという構成になっている。ところが、ウェイリーは最初の地を CHORUS として第三者が天人の様子を表現する構成にし、後の地を ANGEL の中に組み込んで天人の言葉として表現するというように、全体として原典と逆の構成にしている。このように、意味を優先させるために形式を大幅に変更している。七五調を基本とした能の音楽的リズムを全く無視しているのみならず、能の構成そのものを変更していることになる。

原典では、天人が天上界と変わらない地上界の春の美しさを愛でつつ、天上界と地上界の調和を称えている。すなわち天が日本を愛し、その国土の繁栄を祝福することを主題としている。一方、ウェイリーは地上界の美しさを表現してはいるものの、天人を通して日本を祝福するという主題を明示してはいない。能『羽衣』の意味内容を伝えようとしているが、その主題を明瞭に伝えるまでには至っていない。

その他、原典の語句の解釈の違いが何箇所もあり、また原典の逐語訳でかえって意味が不明になっている箇所もある。

次に、ウェイリーの英訳の問題点を列挙しながら試訳を進めることにする。試訳では、クセの構成を原典に忠実に CHORUS、ANGEL、CHORUS とし、初めの CHORUS は地謡が天人自身の言葉を代弁する形に、後の CHORUS は地謡が天人の様子を述べる形にする。さらに、原典の意味内容と同時にできるかぎり原典の文体を伝えられるように工夫する。つまり、主題を含めた意味内容が明瞭に伝えられるように工夫し、掛詞などの修辞法をできるかぎり生かしつつ、七五調の韻律で能を上演できる形式に英訳する。

## II

1行目の「春霞」という表現は、クセの謡い出しであり、次の句「鬢きにけり久方の」の主語かつ主題になるので、イメージの定着のうえで大変重要な役目を担っている。ところがウェイリーの英訳では、原典の1行目と2行目をまとめて1行とし、主題を Now upon the earth のごとく「地上」に持って来て、「春霞」を the long mists of Spring として文尾に置くことによって、この大切な構成を崩している。次のように「春霞」を5音節に英訳して文頭に出せば、「春霞」のイメージを有効に表出し、能の韻律にも合う<sup>6)</sup>。

A veil of spring mists

Hangs over the hills and fields. In the World of Moon  
Heavenly *Katsura* trees are in full blossom.

これを次のように、英語の12音節を八拍のリズムに当てはめることができる。

1	2	3	4	5	6	7	8
A veil of spring mists							
Hangs	—	o- ver	the	—	hills and fields.	—	In the World of Moon
Heav-	—	en- ly	Ka-	—	tsu- ra	trees	— are in full blos- — —
—	—	—	som .	In	—	dee- d	— in the soft sun- light the
blos-	—	soms on my	—	hair look gay.	—	The won- ders of spring	—

2行目の「久方の」は「月」にかかる枕詞なので訳出しない。ウェイリーも英訳していない。

3行目の「花や咲く」は、紀貫之「春霞たなびきにけり久方の月の桂も花や咲くらん」からの本歌取りであるが、原作では「春霞がたなびくようになった。あの月の中の桂の木にも春が来て花が咲いていることだろうよ」の意味で推量になっている<sup>7)</sup>。ウェイリーの英訳は紀貫之の原作に従って Who knows...? としたように思われるが、月世界から飛翔した天人には月世界に桂の花が咲いていることは周知の事実なので能では断定になっている。

6行目と7行目の「天ならでここも妙なり」を、ウェイリーは、

Not heaven is here, but beauty of the wind and the sky.

のようにこの地上の美しさを「風と空」の美しさに集約している。原典では、「面白いこと天上界だけではなく、ここ地上の世界もすばらしいことだ<sup>8)</sup>」の意味であり、「妙(たへ)」は「神秘的にさえ思われる感じ。神々しいほどにすぐれている」の意味なので<sup>9)</sup>、glorious を用いて10音節で英訳し、不足する2音節分を次の句へ回し、7行目の「天つ風」を7音節で英訳してはどうであろうか。

No less glorious

Is earth than heaven. Blow, gentle winds of Heavens,

7行目と8行目の「天つ風雲の通路吹き閉じよ少女の姿暫し留まりて」は、良岑宗貞「天つ風雲の通ひ路吹き閉ぢよ乙女の姿しばし留めむ」からの本歌取りである<sup>10)</sup>。ただし、能原典では「留まりて」が次の11行目と12行目の「こ乃松原の春乃色を三保が崎(「三」は「見」と掛詞)」へと続いており、「空吹く風よ、雲の中の道を吹き閉じておくれ。天乙女のわたしは、しばらくこの地上にとどまって、この松原の、春の景色を見ることにするから」の意味になる。従って、

原典では「留まる」のが天人の意志であるが、ウェイリーの英訳では、次に示すように、「三保が崎」と「見」の掛詞を無視したうえ、第三者が「天人に留まってほしい」と願う表現になっており、原典の構成意図をすり替えている。

Blow, blow, you wind, and build  
 Cloud-walls across the sky, lest the vision leave us  
 Of a maid divine!  
 This tint of springtime in the woods,  
 This colour on the headland,

次のほうが原典に忠実である。

Blow, gentle winds of Heavens,  
 Blow until you have closed up the path through the clouds.  
 And let this Heavenly maiden stay here a little longer  
 To see the beauty of spring round Pine Beach. I wonder  
 Which is best, the vernal Cape of Mio,

「こ乃松原の春乃色を三保が崎」における掛詞「三」と「見」の英訳に触れたが、他の掛詞の例では、13行目の「月清き」と「清見潟」、15行目の「類い波」と「類い無し」、24行目の「聞くも妙なり」と「妙なり東歌」、29行目の「蘇命路」と「染め」、30行目と31行目の「浮島が拂ふ」と「浮島が原」がある。ウェイリーは「浮島が拂ふ」と「浮島が原」の英訳は無視しているが、他については、掛詞の英訳に工夫の跡が見られる。たとえば、「月清き」と「清見潟」の場合は、固有名詞「清見潟」を the clear shore と英訳し、

Moonlight on the clear shore ——

のように clear moonlight のイメージを引き出し、「類い無し」の意味に peerless を用いて「類ひ波」の掛詞を表現しようとしている。

Nay, each peerless  
 At the dawn of a Spring day.  
 Waves lapping, wind....

「聞くも妙なり」と「妙なり東歌」については marvellous を用いて、「妙なり」が「天子」を称える歌のことなのか、「東歌」のことなのか、いずれともとれるように、Oh, marvellous

music! とだけ表現している。

「蘇命路」と「染め」は Sumeru's と stained を用いて、

The sunset stained with crimson light  
From Mount Sumeru's side

のように、掛詞を生かそうという努力が見られるが、Mount Sumeru (「蘇命路乃山」の音の間違いと思われる) が富士山のことであることが読者にわからず、さらに、「落日乃くれないハ蘇命路乃山をうつして」の部分の意味の取り違えもあって、28行目と29行目の原典と訳出の落差を大きくしている。原典の意味は、「落日のあざやかな紅は、日本の須弥山(しゅみせん)である富士の山を染めて影を映し、…」が妥当であろう<sup>11)</sup>。

掛詞の面白さを英語で味わうことはできないが、固有名詞を生かしつつ掛詞で表わされている意味を補足することは可能である。

「月清き」と「清見潟」は、

Moon-lit Bay of Kiyomi, ...

「類い波」と「類い無し」は、

But none is equal to the dawn of a spring day:

The waves lapping the sand...

「聞くも妙なり」と「妙なり東歌」は、

What a glorious song to praise the Lord of Earth!

How sweet the angel's azuma song is!

「蘇命路」と「染め」は、

The setting sun crimsons Mt. Fuji, ... (Mt. Fuji が蘇命路の山を指す)

「浮島が拂ふ」と「浮島が原」は、

The gently rippling waters reflect the green pines.

On Ukishima Moor the wind scatters blossoms.

という具合である。

14行目の「いづれや春の曙」の部分は、「三保が崎。月清見潟富士の雪」から「いづれや」へと続き、「この春の三保が崎、月清き秋の清見潟、冬の富士の雪げしき、そのいずれがまさっているのだろうか」の意味を表す。そして、「春の曙」は、「春の曙。類い波」と続いて、「この春の曙のけしきは、他に比類なく」の意味を表し、その春のすばらしさの具体例として、「打ち寄せる波」、「松風」、「のどかな浦の有様」の3例を示しているのである。この入り組んだ意

味がウェイリーの英訳に明瞭に表現されているとは言えない。原典に忠実な英訳をすると、次のようになるであろう。

And let this Heavenly maiden stay here a little longer  
 To see the beauty of spring round Pine Beach. I wonder  
 Which is best, the vernal Cape of Mio,  
 Moon-lit Kiyomi Bay, or snow-dressed Mt. Fuji.  
 But none is equal to the dawn of a spring day:  
 The waves lapping the sand  
 And the sea breezes blowing through the pine trees  
 Wed this quiet seashore.

17行目から20行目に至る部分は、このクセの主題、すなわち、天と地との調和を称え、日本の繁栄を約束している部分である。ウェイリーの英訳ではこの点が明瞭に表現されていない。まず、原典の解釈から考えると、「その上天地ハ。何を隔てん」で、「その上天と地とは、何の隔てがあることぞ」の意味を表すから、天上界と地上界は一体であることを示唆している。「玉垣乃」は「内」にかかる枕詞であるから特に意味をなさない。それをウェイリーのように、Within, without the jewelled temple wall とやったのでは何のことかさっぱり分からない。「内外の神」とは伊勢神宮の内宮と外宮の神、すなわち天照大神と豊受大神のことである<sup>12)</sup>。そして天子はその神々の子孫であると言っているのである。故に、「月も曇らぬ日の本や」は、「日の光はもとより月の光も曇りないのが日本の国である」の意味で、「太陽の恵みを受けている国日本は月の光の恵みも受けている」と言っているのである。このあたりの意味がウェイリーの英訳では十分に表現されていない。次のような英訳はいかがであろうか。

I know nothing breaks the harmony  
 Of heaven and earth. Actually, ruled with love  
 By descendants of the Goddesses of Ise,  
 The Land of the Sun is also illumed by the moon.

21、22、23行目は、天人が日本の国土の長い繁栄を願って歌う部分であり、読人しらず「君が代は天の羽衣稀に来て撫づとも尽きぬ巖ならなん」（貴君の寿命は、羽衣を着た天人がたまに地上に下りて来て、その羽衣でいくら撫でてでも尽きることがない途方もなく大きな巖のような、限りない長さであってほしいと願うことだ）が本歌である<sup>13)</sup>。しかし、ウェイリーは *May our Lord's life...* と英訳し、天人が月世界の天子を称える歌にしている。原典に従えば、次のようになるはずである。

ANGEL (*Shite*)

May Your Majesty

Live long! Like a solid rock that will not diminish,

CHORUS

However long the angels rub it with their robes.

26行目に楽器の種類が並べられているが、ウェイリーは笙(しよう)を pan-pipes、笛(ちやく)を flute、琴(きん)を harp、箏篋(くご)を zither と表現している。pan-pipes は音が多少とも笙に似ているということであろうか。試訳では25、26、27行を原典の音節数に合わせて次のようにした。

1	2	3	4	5	6	7	8
		With	—	the	sound	of	—
		dif-	fer-	ent	pipes,	flutes	and
harps	—	her	ho-	ly	—	pure	voice
		re-	sounds	a-	cross	the	clouds
—	—						—

最後の32行目と33行目は、天人の舞姿の美しさを表現した部分である。「袖は白雲のように軽やかで、その舞姿は雪の舞うように美しい」の意味であるが、ウェイリーの英訳は、白のイメージに統一した点は美しい韻文になっているが、原典の意味と形式から大きく逸脱している。

For whiteness whirled  
 A snow of blossom blasted  
 By the wild winds, a white cloud  
 Of sleeves waving.

原典の意味と韻律を生かした次の英訳はどうであろうか。

She dances in the air like swirling snowflakes,  
 Like white clouds her long feathery sleeves whirling.

1	2	3	4	5	6	7	8
		She	dan-	—	ces	in	the
		—	air	like	swirl-	ing	snow-
Like	—	white	clouds	her	—	long	fea-
		ther-	—	y	sleeves	whirl-	ing
							—

最後に全訳を掲げる。

CHORUS (*Kuse*)

A veil of spring mists  
 Hangs over the hills and fields. In the World of Moon  
 Heavenly *katsura* trees are in full blossom.  
 Indeed in the soft sunlight  
 The blossoms on my hair look gay.  
 The wonders of spring I am enchanted by!  
 No less glorious  
 Is earth than heaven. Blow, gentle winds of Heavens,  
 Blow until you have closed up the path through the clouds.  
 And let this Heavenly maiden stay here a little longer  
 To see the beauty of spring round Pine Beach. I wonder  
 which is best, the vernal Cape of Mio,  
 Moon-lit Kiyomi Bay, or snow-dressed Mt. Fuji.  
 But none is equal to the dawn of a spring day:  
 The waves lapping the sand  
 And the sea breezes blowing through the pine trees  
 Wed this quiet seashore.  
 I know nothing breaks the harmony  
 Of heaven and earth. Actually, ruled with love  
 By descendants of the Goddesses of Ise,  
 The Land of the Sun is also illumed by the moon.

ANGEL (*Shite*)

May Your Majesty  
 Live long! Like a solid rock that will not diminish,

CHORUS (*Kuse*)

However long the angels rub it with their robes.  
 What a glorious song to praise the Lord of Earth!  
 How sweet the angel's *azuma* song is!  
 With the sound of different pipes, flutes and harps,  
 Her holy pure voice resounds across the clouds.  
 The setting sun crimsons Mt. Fuji, which  
 Casts its large shadow on the surrounding hilly lands.

The gently rippling waters reflect the green pines.  
 On Ukishima Moor the wind scatters blossoms.  
 She dances in the air like swirling snowflakes,  
 Like white clouds her long feathery sleeves whirling.

### III

ウェイリーの英訳は、地とシテの働きを自由に変え、七五調を基本とした能の音楽的リズムにとらわれない英訳を心がけている。『羽衣』という題材だけ借りて、原典に捕らわれず、ひたすら魅力的な英語詩を書くことを心がけたと言えよう。

試訳では、あえて原典に忠実に、能の音楽的リズムを再現することに固執した。能の八拍のリズムに合わせてしようとするあまり、英語として十分に表現しきれない部分が出てきたかもしれない。その場合いちばん英訳に困難を感じたのは掛詞の英訳である。掛詞をどのように英訳に生かすかは今後の課題となるであろう。

完成した英訳が英文学として鑑賞に耐えないものであるならば、能の音楽的リズムを英訳に生かすことは無駄である。

完成した英訳を八拍のリズムに合わせて謡ってみるとき、能で用いている強い発声では快い英語の音声的特徴が生かされないようである。むしろ、能のリズムだけ借りて、英語らしい音声で謡ったほうがよいのかもしれない。また、英語の韻律を生かす謡い方を工夫する必要も出てくるであろう。

日本の能を世界に紹介する場合、能をそのまま上演するのが一番よいことは間違いないが、意味をできるかぎり伝える一つの方法として、ドイツオペラが日本語訳で上演されるように、翻訳で能が上演されてもよいであろう。自ら能の演者として多数の英語能を演じてきたリチャード・エマートが英語能について次のように語っているが、英語能が母語話者に受け入れられる可能性を示唆して心強い<sup>14)</sup>。

I realize that I am fascinated with noh and enjoy seeing good performances of it. And as a non-Japanese, I also feel intuitively that it has unique possibilities in my own native English language.

### 注

- 1) フェノロサの残した能の翻訳と研究ノートをもとにパウンドが英訳を完成させた。『羽衣』は1914年10月、『クオタリー・レビュー』紙に、「日本の古典演劇」として「フェノロサの能論」と共に発表された。その後、1916年に出版された『能、すなわち芸能——日本古典演劇研究』(‘Noh’ or Accomplishment, A Study of Classical Stage of Japan)の中に共著として収められた。長谷川年光『イエイツと能とモダニズム』(ユー・シー・プランニング、1995) 3-11頁参照。
- 2) Arthur Waley, (First published in 1921) *The Nō Plays of Japan* (Rutland, Vermont: C.E. Tuttle Com-

- pany, Inc., 1976) 178-185.
- 3) Royall Tyler, *Japanese Nō Dramas* (Penguin Books, 1992) 96-107.
  - 4) 原典は観世流大成版『羽衣』(檜書店、1968)による。
  - 5) 要約の一部を小山弘志、佐藤健一郎校注・訳『古典文学全集謡曲集1』(小学館、1997) 381- 385頁から引用。以下、能原典の解釈に当たってはこの版を参考文献とした。括弧によって頁数を示す。
  - 6) 「春箴」は能では「はるがすみ」で5文字と考えるが、本論文では英語の音節に言及するため、ha-ru-ga-su-miの5音節と考える。
  - 7) 片桐洋一校注『新日本古典文学体系6 後撰和歌集』巻第一・春上、(岩波書店、1990) 9頁参照。
  - 8) 小山弘志、佐藤健一郎校注・訳『古典文学全集謡曲集1』(小学館、1997) 387頁参照。
  - 9) 松村明他編『古語辞典』(旺文社、1983) 参照。
  - 10) 小島憲之、新井栄蔵校注『新古典文学体系5 古今和歌集』巻第十七、雑歌上(岩波書店、1989) 264頁参照。
  - 11) 小山弘志、佐藤健一郎校注・訳『古典文学全集謡曲集1』(小学館、1997) 388参照。
  - 12) 井上順孝他編集 『神道辞典』國學院大学日本文化研究所編(弘文堂、1994) 46、47、604頁参照。
  - 13) 小町谷照彦 校注 『拾遺和歌集』新日本古典文学体系7(岩波書店、1990) 85頁参照。
  - 14) Richard Emmert, *Noh in English* (Teichiku Records Co. Ltd. Japan, 1990) Explanatory booklet attached to the Compact Disk, 15.